

と畜検査から見た豚丹毒の発生動向と問題点

青山雅弘（神奈川県食肉衛生検査所）

Aoyama M.(1995). Occurrence and problems of swine erysipelas from the stand points of slaughter house inspection. Proc. Jpn. Pig Vet. Soc. 28 : 18-21

1. はじめに

と畜検査において豚丹毒がしばしば発見され、特に関節炎型豚丹毒の疑いにより保留となり精密検査を実施するケースが目立っている。

2. 豚丹毒の摘発

a. 生体検査

蕁麻疹（菱形疹）が見られると屠殺禁止となり農場に持ち帰ってもらっている。患畜の背中に×印を書き、誰でも分かるようにしている。

b. 屠体検査

心内膜炎と関節炎が主な所見である。心内膜炎は疣贅性心内膜炎としてみられ、敗血症も併発している。

関節炎型では、内側腸骨リンパ節の腫大、出血、壊死が見られる。関節の断面では、絨毛の増生と関節液の増量が見られる。

c. 細菌検査

病変部をスライドグラスに塗抹し、グラム染色で菌を確認している。細菌培養としては好気、嫌気及びアザイド培地を用いた。

関節炎の材料としては、第1肋骨下リンパ節、内側腸骨下リンパ節、膝下リンパ節、前後肢の関節液の左

右から10ヶ所を検査した。

通常の細菌検査では、アザイド培地で37℃48時間培養し、分離培養として37℃48時間培養後、コロニーを鏡検する。また、生化学的性状検査も分離培養後実施している。従って、豚丹毒菌の検査に4日を必要とした。

アザイド培地で24時間培養後に遠心分離で集菌し、残渣をアザイド培地で培養する、遠心分離法を用いて、3日で判定できるようにした。土、日の休みの関係で月、火、木曜日しか実施できないが、保留期間を短縮することができた。

d. と畜検査所における過去10年間の豚丹毒の疫学と畜検査で廃棄となる原因として、豚丹毒、敗血症、尿毒症、黄疸、その他があるが、豚丹毒が半数以上を占めていた（図1）。平成3年と6年を見ても、尿毒症や敗血症の数に変化はないが、豚丹毒のみが上昇している（図2）。

図1 豚の全部廃棄及び殺禁止の状況（過去10年間）

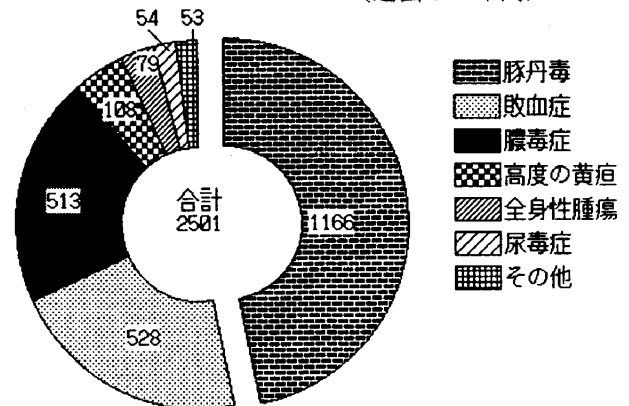
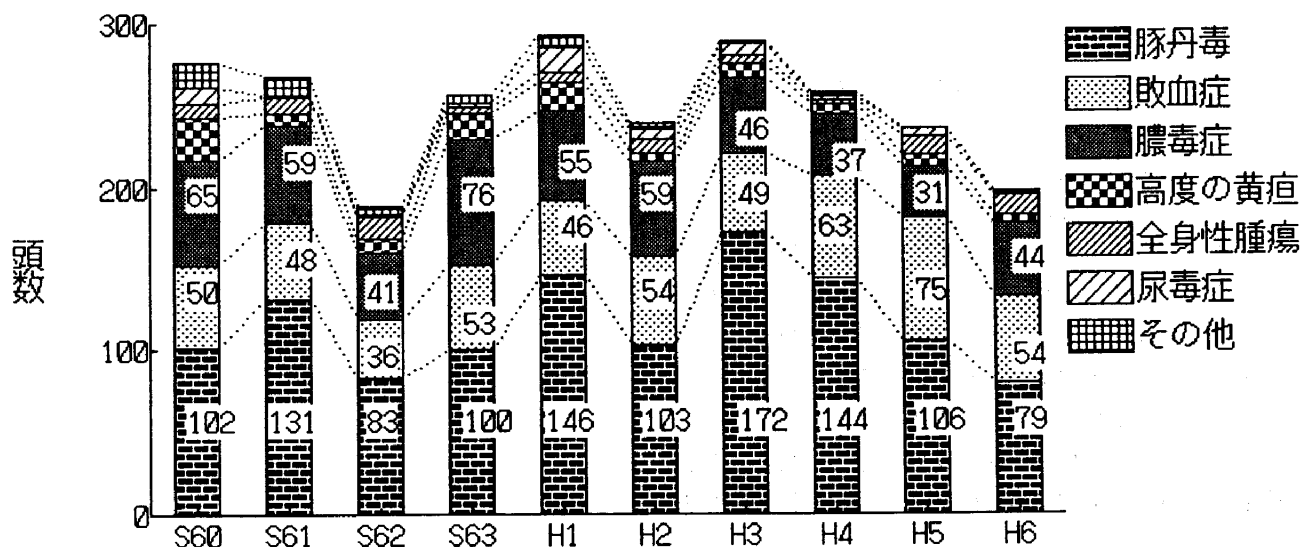


図2 全部廃棄及び殺禁止の状況（豚における過去10年間）



豚丹毒の型別としては、蕁麻疹型と心内膜炎型は少なく、関節炎型が62～82%であった(図3)。

月別の発生状況としては、蕁麻疹型と心内膜炎型は月による発生傾向はなかったが、関節炎型は冬と春口に多く、夏に少なかった(図4)。

関節炎からの菌の分離状況は平成6年は陰性のものの方が、陽性のものより多かった(図5)。これはあらかじめ、豚丹毒発生農家の情報を入手しており、その農家の検体については、疑わしきは罰する的方式で保留したためと考えられた。

3. 平成6年度の農家別発生状況

平成6年度は当検査所で豚丹毒として処理された豚は79頭で、43戸の農家に由来した。豚丹毒の発生が1

頭の農家は32戸、6、7及び11頭の農家が併せて4戸であった(図6)。複数発生した農家でも、集団的に発生するのではなく、散発的であった。

4. 薬剤感受性

昭和63年の薬剤感受性試験ではテトラサイクリン耐性のものが見られた(表1)。平成6年の20株を用いた検査では、ペニシリンやアンピシリンのペニシリン系、及びセファレキシシンやセファロイジンのセフェム系に耐性の菌があった(表2)。

(第49回日本豚病研究会発表)

住所：〒259-12 平塚市寺田縄38-2

図3 豚丹毒の検出状況(過去10年)

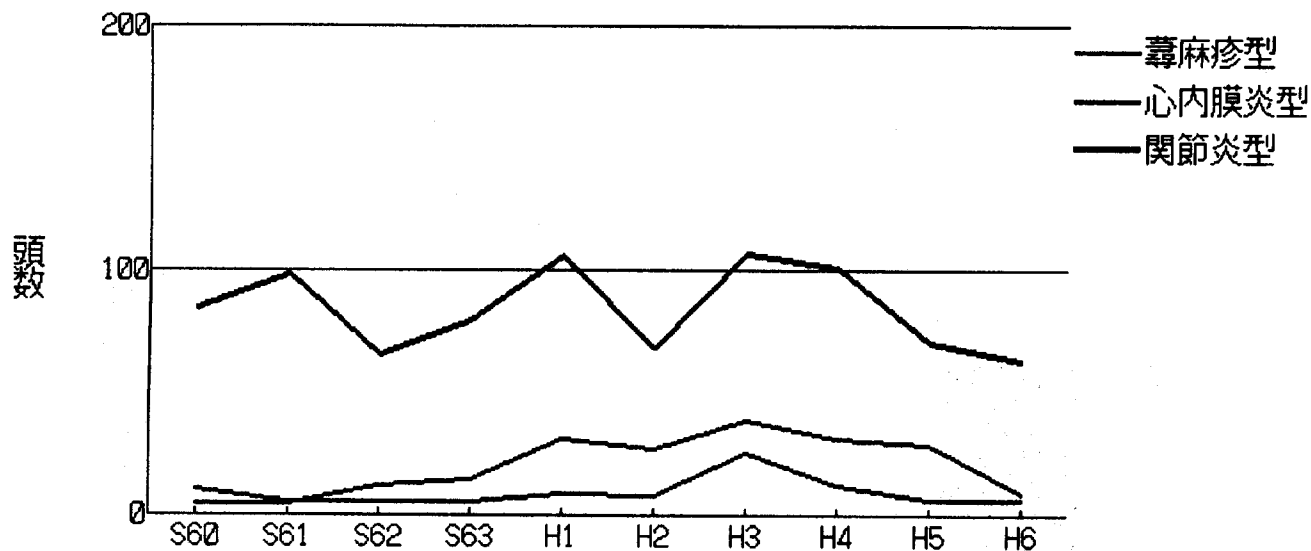


図4 豚丹毒の月別検出状況(過去10年間の総計)

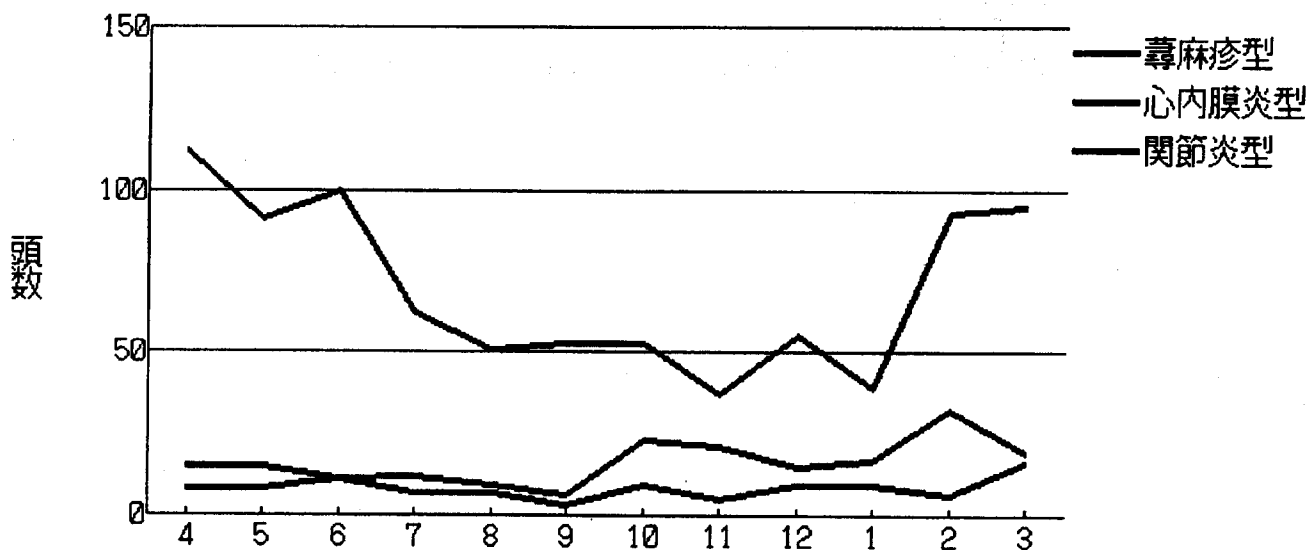


図5 関節炎型豚丹毒の細菌検査実施状況
陽性例と陰性例（過去10年間）

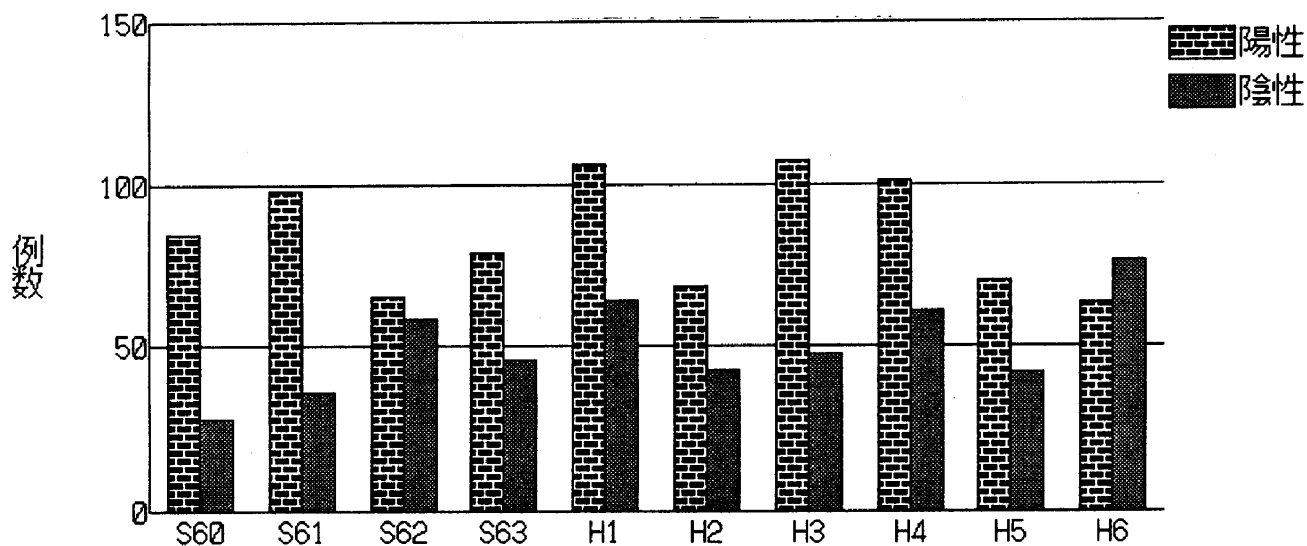


図6 豚丹毒検出農家戸数
(平成6年度: 43戸)

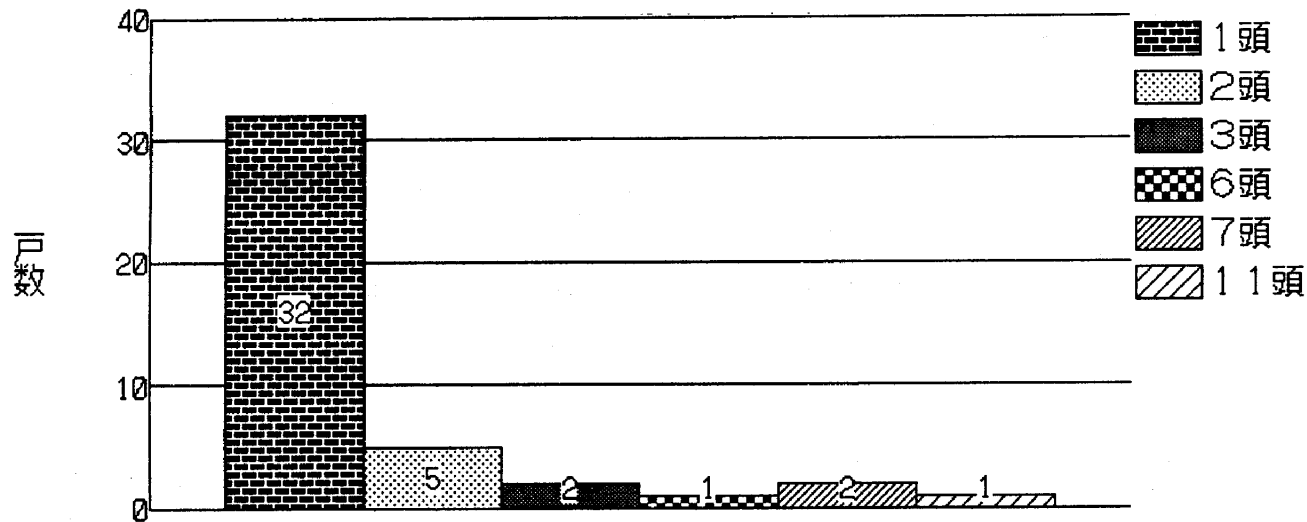


表1 豚丹毒菌の薬剤感受性（昭和63年度）

薬 剤	Resistant (耐性)	Intermediate (中間)	Susceptible (感受性)
テトラサイクリン	4 0	2	2 2
ペニシリン	0	—	6 4
アンピシリン	0	—	6 4
セファレキシン	0	4	6 0
セファロリジン	0	0	6 0
クロラムフェニコール	1	0	6 3
ストレプトマイシン	2 1	3 1	1 2
ゲンタマイシン	0	2	6 2
エリスロマイシン	2	0	6 2
オレアンドマイシン	1	1	6 1
リンコマイシン	1	5	5 8

表2 豚丹毒菌の薬剤感受性（平成6年度）

薬 剤	Resistant (耐性)	Intermediate (中間)	Susceptible (感受性)
テトラサイクリン	1 0	0	1 0
ペニシリン	5	—	1 5
アンピシリン	2	—	1 8
セファレキシン	2	3	1 5
セファロリジン	2	0	1 8
クロラムフェニコール	0	4	1 6
ストレプトマイシン	1 0	6	4
ゲンタマイシン	1	1	1 8
エリスロマイシン	0	0	2 0
オレアンドマイシン	0	0	2 0
リンコマイシン	0	2	1 8